


論文審査の結果の要旨及び担当者

報告番号	博(歯)甲第 146 号	氏名	富樫 宏明
論文審査担当者	主査教員 井口 次夫 副査教員 中山 浩次 副査教員 池田 通		
<p>・論文審査の要旨</p> <p>富樫宏明は平成11年3月に長崎大学歯学部を卒業し、歯科医師国家試験に合格した。その後平成13年4月より長崎大学大学院歯学研究科 に入学し現在に至る。平成17年11月9日、学位論文の基礎となる研究要旨及び経過を歯学研究科が主催した研究経過報告会で発表した。また語学試験は英語・ドイツ語共に平成17年12月1日に合格した。</p> <p>学位論文の主論文として「Fractionated photodynamic therapy for a human oral squamous cell carcinoma xenograft」(Oral Oncology, in press)を歯学部大学院に提出し、博士(歯学)の学位を申請した。歯学研究教授会は、これを平成17年12月14日の定例教授会に付議し、論文の内容の要旨並びに申請の資格等を検討した結果、受理しても差し支えないものと認めたので、3名の審査委員を選定した。審査委員は、共同で論文の内容を慎重に審議し、申請者から研究内容の報告を受けた後、試問を行い、論文審査の結果を平成18年1月18日の歯学研究教授会に報告した。本研究の内容は以下の通りである。</p> <p>光線力学的治療以下 PDT は、光感受性物質の投与を行い、その後にレーザー照射を行う癌の治療法である。PDTはレーザー照射により、腫瘍内に光化学反応がおこり、腫瘍内の酸素が一重項酸素に変化することにより、抗腫瘍効果を生む。PDT は重篤な副作用のないことが利点である。しかし、レーザー照射が招く腫瘍内の低酸素化現象が抗腫瘍効果減弱の一因と考えられている。本実験においては、この PDT の弱点を補うべく、以下のような実験を行った。実験対象として、ヒト口腔扁平上皮癌担癌ヌードマウスを用いた。まず、血管内皮増殖因子(VEGF)発現を腫瘍内再酸素化の指標とし、PDT 後の腫瘍内 VEGF 発現を免疫組織学的に検索した。その結果、PDT6 時間後に腫瘍内 VEGF 発現は最大となり、24時間後には VEGF 発現は未治療群と同レベルとなった。以上より、PDT 後6時間で腫瘍内の低酸素化が進み、24時間後にPDT前の酸素レベルに帰することが示唆された。以上の結果より、PDT を行う際、24時間間隔をあけたレーザー分割照射を行うことがより効果的であるのではないかと考えた。そこで、レーザー連続照射 PDT 群と24時間間隔をあけたレーザー分割照射 PDT 群の抗腫瘍効果比較を行った。その結果、有意にレーザー分割照射 PDT 群がレーザー連続照射 PDT 群より高い抗腫瘍効果が認められた。</p>			

研究科教授会は上記審査委員の報告に基づき、これを討議に付して審査した結果、本研究で得られた知見が口腔外科臨床の進歩に有用であると認めた。